◀「あかじやうご」の絵（部分）（『下書対州産物絵図』）

対馬歴史民俗資料館報

第 21 号
平成10年 3 月20日

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817—0021
電話（09205）2—3687

印刷所
長崎市栄町 6 —23
昭和堂印刷
電話（095）821—1234

開館二十周年記念事業

中村仁志

本館は、昭和五十二年（一九七七）四月、対馬藩の藩政史料である「宗家文庫史料」を中心として、民衆が昔から使ってきた道具類（民俗資料）、島内の各遺跡から出土した遺物（考古資料）などを収集・保管するために設置された施設で、今年開館二十周年を迎えた。

対馬と韓国は、有史以前のはるかな昔から今日まで、常に一衣帯水の隣人としてさまざまな交流を続けてきた間がらである。

それは、鎖国時代においてさえも断絶することなく継続され、両国の間では、使節を初め多くの人と文物が往来した。

そこでこの度の二十周年記念展では、島内を視野に入れながらも朝鮮半島に目を転じ、「韓国との文化交流史」をテーマに、特別講演、シンポジウム、特別展などを開くことにした。

講師についていえば、日韓双方から、両国交流史の研究で著名な研究者を招聘し、また、展示資料は、大陸系の渡来文物などを中心に展示することによって、対馬と韓国との文化交流の歴史の跡を検証し、「韓国との善隣友好」を標榜する長崎県の二十一世紀を展望しようとするものであった。

宗家文庫旧蔵で、現在韓国国史編纂委員会所蔵になる宗家史料のうち、わずか八点ではあったが、七十年ぶりの里帰りが実現できたことは、今後の対馬と韓国、ひいては長崎県と韓国との友好促進のためにも、いささか貢献するところがあったのではないかと思っている。

（本館館長）

丹羽正伯と『諸国産物帳』

―『下書対州産物絵図』（御国控）の発見―

一

今からおよそ二百六十年前、日本列島にどのような農作物が作られ、またどのような動物がいて、どのような植物が生育しているか、つまり日本列島全域とその海域における生物相・植物相、さらに鉱物にいたるまで、公儀の名のもとに、公の事業として、その生態調査が行なわれたことがあった。調査は各大名領、天領、寺社領ごとに実施編集され『何々国産物帳（産物記録）』（絵図帳、註書がつく）と題され、幕府に集められた。

この調査は、わが国学術調査史上前代未聞、そしてまた、全国にわたって行われた空前絶後の大がかりな博物学の調査であった。この調査で全国から集められた報告書を集計すると、ゆうに千冊にも上ったと考えられるが、この厖大な量の報告書は残念なことに、また不思議なことにその後まったく行くえがわからなくなってしまう。

ところが、幸いなことに、それぞれの国に、その御国控が残ることとなり、現在までに、安田健氏（自然環境センター客員研究員）の長年にわたる懸命な探索により、全国で二百七十七点（全体の三分ノ一程度カ）の産物帳、絵図帳が存在することが判明しており[1]、本館収蔵の宗家文庫史料の中にある、『対州并田代産物記録』は、その内の一冊である[2]。

「下書対州産物絵図」（墨付22丁、縦28.0cm×横21.2cm）

この世紀の『諸国産物帳』の対馬国分のうち、従来所在不明もしくは労力を要するため、あるいは「国控」は作られなかったのではないかと考えていた『対州産物記録』と対をなす絵図帳（『下書対州産物絵図』―原色、御国控、絵師は俵多平次、小田安平の二名）が、最近、同文庫中の「絵図類」の中に存在していることがわかった。

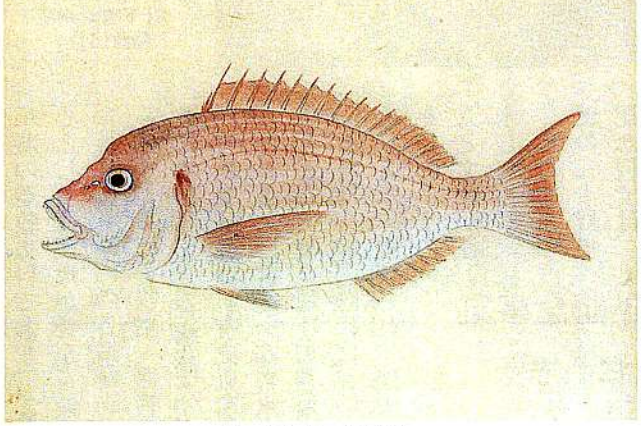
この大事業を企画し、終始その指揮・指導に当ったのが、幕府の本草学者、丹羽正伯[3]であった。

このころ、元禄（一六八八）から享保（一七三六）にかけては、江戸は、庶民の生活も向上し、学問も興隆、自然、人文両科学とも花開き、人材は、きら星のごとく輩出し絢爛たる時代を画した時期であった。

儒学における、木下順庵（一六二一―九八）を師とする、新井白石（一六五七―一七二五）、雨森芳洲（一六六八―一七五五）などの木門の高足、陽明学の中江藤樹（一六〇八―一六四八）、文学の井原西鶴（一六四二―九三）、近松門左衛門（一六五三―一七二四）、松尾芭蕉（一六四四―九四）、国学の契沖（一六四〇―一七〇一）、歴史学の徳川光圀（一六二八―一七〇一）、美術の尾形光琳（一六五八―一七一六）、菱川宣師（一六九四？）、また和算の関孝和（一七〇八？）、『大和本草』を著した貝原篤信（益軒一六三〇―一七一四）、『和漢三才絵図』の編者、寺島良庵（生没年未詳）、農業全書の宮崎安貞（一六二三―九七）など、この期における学芸・文化の分野で優れた人物は、江戸を中心に百花繚乱、裾野は地方にも及び目を見張るばかりであった。その地方を代表する文化人といえば、学芸を好み、何事も自分で究める性格の持ち主であった金沢藩の第五代藩主・前田綱紀などはその筆頭であろう。綱紀は、殊に書物に興味をもち、和漢の良書を購入書写し、「加賀は天下の書府」（新井白石）と評されるほど、書籍の蒐集に意を尽くした賢侯として知られる。

さらに、中央の為政者に目を転ずれば、享保の改革などを断行し、特に、実証的、実利的な学問に関心があって自らも法律の勉学に励むなど学術振興にも理解が深く、徳川中興の英王として名君の誉れ高い、八代将軍徳川吉宗（一六八四―一七五一）の時代―。

このように、丹羽正伯は、とみに学問研究の気運が高まり頂点に達した時代背景のなか全国の産物を明らかにするための一大調査を開始したのである。



「ち鯛」（「同絵図」）

一

丹羽正伯は、元禄四年（一六九一）、伊勢国（三重県）松坂の医師・丹羽徳応の長子として生れた。幼名、徳太郎、字は哲夫、号は弥水斎、通称正伯の

「はひいも」と「いはふぢ」（同）

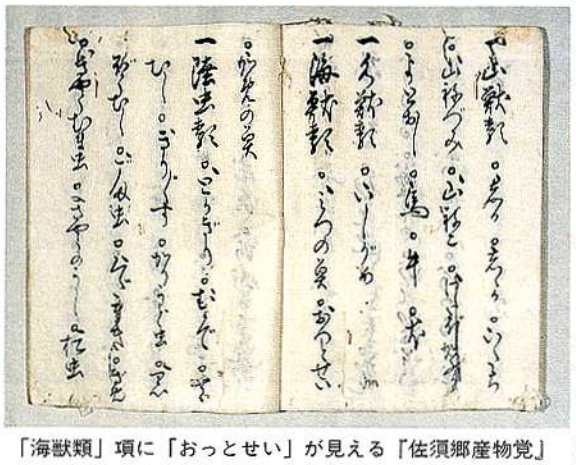
千五百九十種に関する記文を抄出し、これを二十六種に分類、編集した名物学の集成書）の『後編』の編纂の他、『普救類方』、『救民薬方』などの著作を成し、宝暦六年（一七五六）四月十四日、江戸で病死した。享年六十六歳。墓は東京都豊島区西巣鴨町四丁目二十五番地、徳栄山本妙寺にある。

正伯が『産物帳』を編纂するに至ったのは、師稲生若水が編纂半ばにして病死したため頓挫し、未完となった『諸物類纂』の未完分の編纂を将軍吉宗に命じられたのがきっかけで、正伯は将軍側近の要職を命じられたのを巧みに利用し『諸物類纂』の編纂上必要であるという大儀名分のもと、全国諸領に、『産物帳』編集を指示する権限を確保したのである。ちなみに、正伯は延享四年（一七四七）までに、先に若水が編纂した三百六十二巻に「続編」「増補」を加え千五十巻を成し『諸物類纂』を完成している。

ところで、『諸物類纂』は、中国の文献の記述を再編する作業なので、特に日本国内の産物などをこの本に反映させる必要性はないのではないかと考えられる。それなのに、正伯は、『諸物類纂』編纂上必要であるという。つまり、『諸物類纂』の編纂にことよせて、日本の産物調査をしようというのが正伯の真意であった。動機は、多少こじつけのそしりを免れないが、そこが正伯の偉いところでもあり、同時にこの調査にかける正伯の並々ならぬ意気込みが感じられる。

そして、全国諸領に「丹羽正伯から、何か照会があれば答えるように」という公達を出させ、これをよりどころに、かつこれを最大限に利用して、日本各地の農産物、動植物、鉱物にいたるまで、地方の産物の悉皆調査を命じたのである。

調査は、まず、享保二十年（一七三五）、閏三月から四月にかけて、諸領の江戸留守居たちが、正伯のもとに呼ばれ、一定の編集パターンを示された後、おのおのの領内に産する動植物名などを調べ俗名で書き上げ、自分の属する領の『産物帳』を編纂するよう指示された（対馬藩からは浜田伊左衛門が出席）。時に、正伯四十三歳。これを受けて、それぞれの領では、一斉に領内に産する産物についての調査が始まり、その土地の呼び名で書きつづって編集し、正伯のもとへ報告した。



「海獣類」項に「おっとせい」が見える『佐須郷産物覚』

正伯は、全国から次々と送られてくる報告書に、いちいち目を通し、名称だけではわからないものには、絵図と説明、あるいは註書を書き、植物にあっては、押葉を作って再度提出するように、それぞれの領に送り返した。ようやく面倒な調査が終ってひと安心していた諸領は、ふたたびやっかいな難題を持ち込まれたのである。

特に、動物や植物の絵図となると、一朝一夕に描けるものではない。中には、日ごろあまり見かけない動物も報告しているはずである。植物の場合は、葉茎だけでなく花や実も描けという。誠に面倒この上もない追加調査であった。

しかも、点数が少なければまだいいとして五十点、百点と多数の絵図が求められた領では、お抱え絵師も音をあげたにちがいない。しかし、ともかく、このようにして、これまたおびただしい点数の絵図が描かれ、それらは、すべて正伯のもとへ集まった。

ち貞機と名のった。はじめ医を学んだが家業は継がず、跡を妹夫妻にゆずり京都に出て、稲生若水（江戸に生まれる。名は宣義、号若水。少時より動植物を好む。木下順庵に師事、本草学者。金沢藩の前田綱紀に請われ藩儒者に召し抱えられる。のち『庶物類纂』の編集を命じられる、一六五五―一七一五）の門に入り、本草学を学んだ。

享保五年（一七二〇）、二十九歳のころ、江戸に出て、幕命により採薬使となり、箱根、富士山、日光などで採薬に従事したほか、二年後の享保七年（一七二二）には、下総国（千葉県）に五万坪（一六五〇ヘクタール）が正伯に下され、薬種の栽培を命ぜられている。

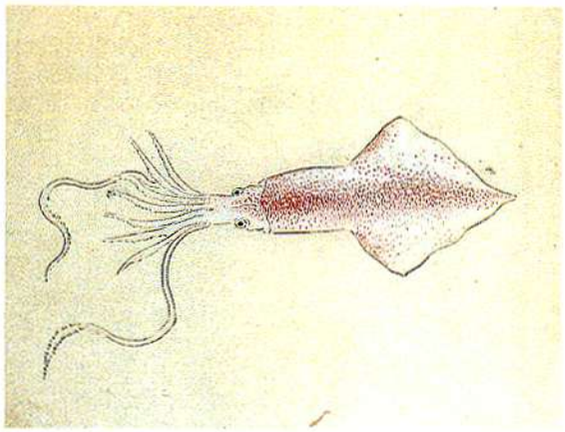
その後、正伯は『庶物類纂』（中国の典籍百七十余に出ている動物・植物・鉱物など三

三

丹羽正伯が、全国にあれだけ執拗に詳細な報告を求め、心血を注いで完成させた『産物帳』は、その後、一体、どこへいったのであろうか。本産物帳について、当の正伯自身、その後一言も語ることなく、この報告書（正本）は、ある日忽然と姿を消す。何らかの理由があって密かに処分されたのか、海外に持ち出されたのか、沓としてその行くえはわからず、まぼろしの大著『諸国産物帳』は、謎につつまれたままである。

この程、宗家文庫史料の中から発見された対馬国産物の絵図帳（控）は、冊子仕立てのものが一冊（墨付二十三丁、重複を含み絵図四十一点収録）である。

なお、この他に成冊に及んでいない一紙ものの絵図のグループが十六枚あるが、これらは日本の産物調査に先だって、享保六年（一七二一）より始った、朝鮮国内の薬材調査[5]に関連し、倭館（室町～江戸時代、朝鮮半島におかれた日本人のための在外公館）よりもたらされた絵図資料の一部と考えられる。



「ぶといか」（同）

二百六十年前の日本列島では、北海道を除く、ほぼ日本の全域でオオカミが吠え、同じく、日本全域の澄み切った河川には、カワウソが棲んでいた。トキも、関東・四国・九州地方の一部以外の日本海側（瀬戸内以北）に、まんべんなく棲息、飛来していた。この「産物帳」からうかがえるこのころの日本列島は、自然が豊富であった、というより自然そのままであった。すなわち、人間は、大自然の中で、気どらずごく当たり前に目の前の動物や植物にやさしく対しともに生き、ともに繁栄していたのである。

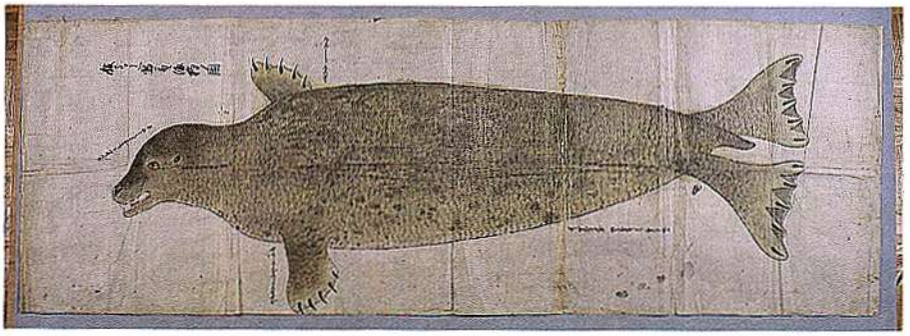
対馬についていえば、郷村からの報告によれば、カワウソが棲んでいる所は豊崎郷（上対馬町）、佐護郷（上県町）、三根郷（峰町）の三郷村である。大きな川のある、伊奈郷（上県町）、仁位郷（豊玉町）、佐須郷（厳原町）から報告がないのは、おそらく、調査もれであろう。オットセイを報告したのは佐須・三根両郷であるが、これより五十八年前の延宝五年[6]（一六七七）、小船越（美津島町）で捕獲されている。また、アシカも享保二十年[7]（一七三五）と文化四年[8]（一八〇七）に、それぞれ安神（厳原町）と横浦（豊玉町）で仕留めたことが記録されている。

またアザラシについていえば前記倭館より届けられた絵図の一枚と思われる「館守ヨリ写来候海豹ノ図」と墨書された海豹（アザラシ）の絵がある（館守＝倭館の館主）。これらは、対馬周辺をはじめ朝鮮の沿岸にも棲息していたのである。

オットセイにしてもアシカにしても、またアザラシにしても日本近海からその姿が消えて久しい今日、宗家文庫史料のこの記録自体、わが国博物学史上、きわめて貴重な記録といわなければならない。

また、いま棲息数が激減し絶滅が心配されているツシマヤマネコは、「山獣」の頂に、さりげなく「山猫」として書き上げてある。

世界中でかなりの種の野性動物の存亡が、地球上で最も恐ろしい「天敵」人類のために危機に瀕している時、今から二百六十年前に日本全国の生物相・植物相の調査に身を投じた一人のユニークな本草学者丹波正伯と、名前こそ残らなかったが、こぞって、この調査にたずさわった日本全国の何百人という多くの役人（調査員）―これら情熱家たちの共同著作となった、『諸国産物帳』（国控）は、今日、江戸時代の美しい日本列島―それは大自然の真っただ中にあった―の姿を再現してくれる唯一最大の基本文献といえよう。



「館守ヨリ写来候海豹ノ図」（一枚物、縦60.5cm×横176.3cm）

註

(1) 安田健編・小松勝助解説『諸国産物帳資料集成⑪対馬・肥前』（科学書院刊、八一二ページ）

(2) 対州并田代産物記録』は、編集・清書本で、本記録は平成三年、その下書となった郷村別の「八郷産物覚」の原文書十一冊とともに、前掲『集成⑪対馬・肥前』に収録。

(3) 前掲『集成⑪』七九八ページ。

(4) 安田健『江戸諸国産物帳』の他、『国史大辞典』（十一巻、二七〇ページ）なども参照。「稲生若水」、『諸物類纂』についても『同辞典』（一、七巻）に簡単な解説がある。

(5) 田代和生「享保改革期の朝鮮薬材調査」（『東アジアの本草と博物学の世界』(下)所収）

(6) 御郡奉行所「毎日記」延宝五年二月五日条。

(7) 同「毎日記」享保二十年二月十一日条。

(8) 同「毎日記」文化四年十二月十九日条。

（小松勝助）

藩校日新館

—対馬藩の教育—

一、はじめに

幕末の一時期、対馬藩尊王攘夷派の拠点となり、わずか九ヵ月でその使命を終えたのが藩校日新館であった。当時の館舎は残っていないが、裁判所の改築工事のため、解体・保存されていた館門が平成五年（一九九三）三月に復元され、当時の面影を今日に伝えている。もと宗氏の中屋敷門であった館門は、幕末における大名家の格式を備えた武家屋敷門として県の有形文化財に指定されている。

二、対馬藩の教育

周知の通り、日本で最初に小学校という名称の学校が開設されたのは、対馬の厳原であった。創立は貞享二年（一六八五）十一月、朝鮮貿易、銀山経営等が順調に伸び、豊かな藩財政を基に第二十一代宗義真が種々の土木・産業・文教政策を実施した時期であった。義真が全国に先駆けてこうした教育施設を創設した背景には、忠孝の道を教えるという人づくりとしての側面があったことはもちろんのこと、朝鮮通信使の渡来に代表されるように、対馬藩が朝鮮通交の窓口として様々な外交事務を統括する役割を担っており、他藩よりも学問に対する必要性が高かったことも一因と考えられる。対馬の地理的・歴史的な特殊性が文教政策にも影響しているのである。日本全国の藩校のうち、宝暦以降に開設されたのが全体の八五％を占め、幕藩体制が揺らぎだした江戸時代後期の開校が圧倒的に多い。[1] このような状況において、いち早く文教施設を整備した義真の先見性には敬意を表さざるを得ない。小学校では八歳から十五歳までの家中の子弟を対象に、経学（経書である四書・五経を研究する学問）・史学・習字・武術などの教育がなされ、その後の対馬の文教興隆の基礎をつくった。

小学校の設立により基礎的な教育設備は整ったものの、対馬藩には十五歳以上の成人を対象とした上級学校はなかった。順調だった藩財政も江戸中期には次第に行き詰まりを見せ、度々幕府から借入金を受ける事態となった。疲弊し始めた藩財政を立て直すためにも人材の育成が急務となり、第二十九代宗義功は儒者満山右内の建議を容れ、天明八年（一七八八）四月、府中国分に講学所を開設した（後に思文館と改称された）。ここでは、十五歳以上の子弟を対象とした教育が行われ、古学を中心に、少ないときでも三十人、多いときには百人の生徒が学んだ。思文館は正式な校舎が無かったため、朝鮮使節一行の客舎であった「使者屋」をはじめ、金石屋形、宝泉寺など転々とし、最終的には元治元年（一八六四）日新館が設立されるにいたって廃校となった。

三、藩校日新館

(1) 設立の経過

十八世紀末頃から日本近海に頻繁に外国船が現れるようになる。幕府は嘉永六年（一八五三）のペリー来航を契機に、アメリカの軍事力を背景とした開国要求に屈し、鎖国を放棄して開国に至る。対馬近海においてもこのころから異国船がしばしば出没したが、ことに文久元年（一八六一）二月には、ロシア船ポサドニック号が浅茅湾に浸入し半年間にわたって占拠するという事件が起こっている。幕末の大きな時代の変化のなかで、対馬もまた例外ではなかったのである。こうした情勢の中、長州藩などを中心とする尊重攘夷運動が高まり対馬藩は、文久二年に対長同盟を成立させ、翌年には攘夷の勅書を受け、長州とともに攘夷の遂行を義務づけられるようになった。

藩内では大浦教之助を中心とする攘夷派と第三十四代藩主宗義達の叔父にあたる勝井五八郎を中心とする佐幕派が対立を深めていったが、次第に攘夷派が藩内の多数を占めるようになった。

宗家文庫史料「毎日記」（文久二年二月十五日条）

文久三年、大浦教之助は文武興隆異賊防御備立御用掛に任じられた。そして大浦は、尊皇攘夷を遂行するためには人材育成と文武の興隆、及び時局に適応した学館の設立が急務であることを藩に建議し、太平寺において夜学を始めた。初めは文武館と称したが、元治元年（一八六四）四月二十七日日新館と改称し尊皇攘夷教育を実施した。これについて先代宗義和は、「馬場筋御屋敷之儀、御隠居所ニ御治定ニ至居候を、此節御隠居様思召を以、右御屋敷之儀、文武館ニ被遊度との御事、別紙之通、御書取を以被仰出、誠ニ以難有御事候」と大いに賛同し馬場筋通りの中屋敷を校舎として提供し、二月二十三日に開校となった。[3]

(2) 職名と職員

館の規則については江戸の昌平黌にならい、また文久三年四月、扇各左衛門らに他国の学制・兵制を探索させ、それらを参照して学則を定めている。例えば、

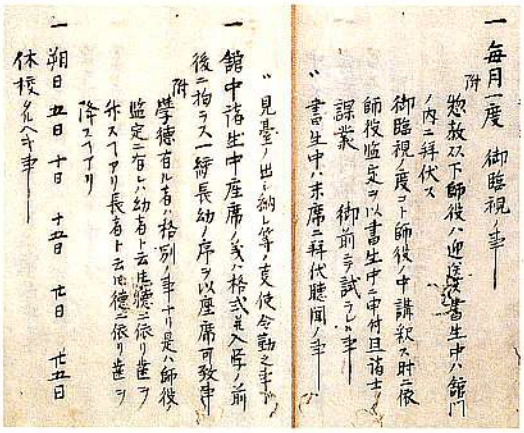
一学頭　一員

他邦ニ而は、多く教授之職ニ当候と相見申候得は、役名御改可被成御事共奉存候得共、肥前多久之学館ニ而は、惣裁之外ニ惣督と相唱、惣裁ニ亜キ候役名相見申候間、只今之通、学頭之称ニ而差支間敷哉と奉存候、

など他藩の状況、各職の役割、設置の有無などの伺いが日新館学頭大浦遠より出されている。視察した諸藩は肥前多久をはじめ、熊本（時習館）、中津（進修館）、佐賀（弘道館）などの名前が見られることから、これらの藩の規則を参考にしたものと思われる。[3] こうして「両道ノ学柄ヲ総領シ、気風ヲ考校シ、勧懲ヲ繰纜シ、以テ誘才徳邦治ヲ賛ク」職である惣教（総裁）には家老古川将監が任じられ、「館律ヲ執リ諸機ヲ監督ス」る役目の学監（学頭）には真文御用人御師範大浦遠が、また「講道説経才ヲ育シ士ヲ造シ以テ学化ヲ隆ニス」る役目の教授には樋口与左衛門があてられた。他にも助教、句読師、手習師などの職員がそろえられ、経学・史学・諸子学（春秋戦国時代の思想家の学説を研究する学問）・文章学・習字・医学の授業にあたった。将来的には兵学・天文学・算学・蘭学にも及ぶ予定であったらしく、前述の日新館よりの伺いにも、例えば蘭学師について、

此外方技ニ属シ候分ハ、其器ニ当候人柄御選挙被仰付カ、又は有志之向新ニ御取立相成候カ、何れ共御賢慮被為在度奉存候、

との伺いが出されこれに対して付紙をもって「以下条〻追而被仰付方可有之候」との返事であった。[4]


一毎月一度　御臨視之事——
附　惣教以下師役ハ迎送書生中ハ館門ノ内ニ拝伏ス
御臨視之度ニハ師役ハ中講釈ス時ニ依師役監定ヲ以書生中ニ申付且諸士ノ課業　御前ニテ試ラレル事——
〃　書生中ハ末席ニ拝伏聴聞ノ事——
〃　見臺ノ出し納し等ノ度使令勤ス事カ
一館中諸生中座席ノ儀ハ格式并入学ノ前後ニ拘ラス一統長幼ノ序ヲ以座席可致事
附　学徳有ル者ハ格別ノ事ナリ是ハ師役監定ニ有ハ幼者ト云ヒ德ニ依リ年ヲ外スレハリ長者ト云ヒ德ニ依リ年ヲ降ス
一朝日　卯日　十日　十五日　七日　十五日
休候ハ名ヘキ事——

宗家文庫史料「学館規則」

(3) 館中規則

このような体制でスタートした館には、二百名を超える藩士が在籍し尊攘派の牙城となった。それゆえ館には厳しい規則が設けられた。例えば「館中ハ殿中同様相心得、聊（いささか）も失敬有之間敷事」「御本間ニ御字被掲置候付、平日トモ君上御出席同様可相心得事」など、校舎が先代の屋敷でもあり、館中での心得は、常に殿様に拝謁しているような厳格さや緊張感が求められた。

館は卯ノ刻（午前六時）から、申ノ刻（午後四時）まで開かれ、書生は辰ノ刻（午前八時）には登館し未ノ刻（午後二時）には退出するきまりであったが、「日暮迄モ相詰、亦ハ夜読等ハ其身精力次第ノ事」とあるように、生徒の意欲次第で夜まで授業が行われる場合もあった。また、座席は、

館中書生中座席ノ儀ハ、格式并入学ノ前後ニ拘ラス一統長幼ノ序ヲ以座席可致事、

とあり、身分や入学の前後にかかわらず年長者から席につくきまりになっていた。館内では「於館中文義討論ノ外諸雑話固ク禁止ノ事」「詩ヲ高吟シ称呼ヲ高声シ看書ノ妨致マシキ事」「書生中他ノ座席ニ往来スヘカラス、若事故有ハ執法ニ申届ヘキ事」「喧嘩口論ハ是非ヲ不論、双方横出（ひしゅつ）シ重テ是ヲ糺明シ、可正館法事」などの禁制があり、これを破った者には、「執法是ヲ論評シ、其者講堂ニ呼出シ教喩スル事」、さらに改めない者には五ヵ月の家蟄（かちつ）（謹慎）が言い渡され、それでもなおらない者には半に二年、あるいは三年入れられ、終身不歯（学友仲間からはずす）という処分がとられた。[5]

また正月開館の時や毎月一度は藩主が出席し、諸士の試業を「御臨視」するなど、藩をあげて文武の振興に努めたため生徒の士気は高く、三月には藩主に佐幕論の俗論を排斥し、攘夷論を根幹にする政策を樹立することとした建白書を提出するなど意気盛んなものがあった。

四、おわりに

多くの優秀な人材が集まり尊皇攘夷派の拠点であった日新館は、元治元年十月十三日藩邸を占拠した勝井派によってことごとく牢居、斬殺等の刑に処せられ、館生の多くが処分された（勝井騒動）。自刃、断頭、斬殺などにより処罪された者は百名を越し、免れた者はわずか六人に過ぎなかったという。これにより、日新館は創立してわずか九ヵ月で廃館となり、対馬藩は多くの人材を失った。

三年後、薩長を中心とする討幕運動により幕府はついに大政奉還を行い、二百六十年にわたり日本を支配した徳川の時代は終わりを告げる。明治になり、版籍奉還、廃藩置県などの大改革が行われ、対馬藩もそうした変革の波にのみ込まれていく。

新しい日本の夜明けを目前に控え多くの若者が志半ばにして世を去ったことを思うと何とも無念でならない。再建された館門の前に立つとそうした思いにかられるのである。

註

(1)「藩校」（『国史大辞典第十一巻』七四二～七六五ページ）
(2)宗家文庫史料「与頭方毎日記」文久二年二月十五日条
(3)同日記　元治元年六月十六日条
(4)宗家文庫史料「学館規則」（記録類Ⅲ　学校）
(5)「館規」（同）
＊右のほか『新対馬島誌』『厳原町教育史』『厳原町誌』などを参考にした。

（西山篤）

半井桃水書状
—対馬洋のこと

一

「君はとしの頃卅年にやおはすらん（略）色いと白く面おだやかに少し笑み給えるさま、誠に三歳の童子もなつくべくこそ覚ゆれ、丈は世の人にすぐれて高く肉豊かにこえ給…」[1]

明治の女流文学を代表する樋口一葉（一八七二～九六）が半井桃水に会ったのは明治二十四年（一八九一）、二十歳の春、「雨少し降」る日の四月十五日のことで、このとき桃水三十二歳であった。

一葉は、生計を立てるため小説を書くことを決意、その手ほどきを受けるために、知人を通して、当時大衆小説家として上り坂にあった桃水を訪ねた。右は、その初対面の折の桃水の第一印象を誌した一葉の日記の一部である。

二

半井桃水は万延元年（一八六〇）十二月二日、半井湛四郎（半井文中の養子、天保三年二月十日生まれ）の長男として、府中（厳原）に生まれた。幼名泉太郎、のち、冽と名のった。家は代々宗家に仕え（御典医）、八十石を賜った。[2]

明治七年（一八七四）、十三歳のとき上京し、共立学舎[3]に学んだ。明治十三年（一八八〇）、二十歳の時、大阪魁新聞社に入社するが、間もなく同新聞社の廃刊にあい、退社して対馬に帰る。[4]明治十五年（一八八二）七月二十三日にソウルで起った京城事件[5]に関連し、その前年釜山に渡っていた桃水は、朝日新聞に同事件に関する現地報道を送った。このことが契機となって報道記者としての敏腕が認められることとなり、桃水は朝日新聞社の第一号の海外特派記者となった。[6]

明治二十一年（一八八八）再び上京し、東京朝日新聞社に入社、この前後より桃水は小説を書き始め同新聞にも発表、新聞連載後は単行本としても出版され徐々に小説家としての地位を築いていった。樋口一葉が小説家志望の意志を伝え、指導を仰ぐため桃水を訪ねたのは、ちょうどこのころのことであった。

一葉は、その後折にふれ桃水を訪ね指導を受けるうち、次第に師以上の感情を抱くようになり桃水に惹かれていく。しかしそのあと足しげく桃水の許へ通う一葉に対して「半井君とのあやしきかんけい有様、口々にそしる」[7]者が出てきたため、以後「文のみにて出入りは少しも」[8]しなくなり、だんだん遠ざかって、二人は決別していった。

このころ、桃水自身も一葉に対して己の力の限界を感じるようになる一方、戯作より純文学を勧めた方が一葉を生かす道だと考えるようになったのではないか[9]という。

半井桃水が没したのは、大正十五年（一九二六）十一月二十一日であった。享年六十七歳。東京都文京区本駒込、繁栄山養昌寺（曹洞宗）に眠る。戒名、観清院謡光冽音居士。

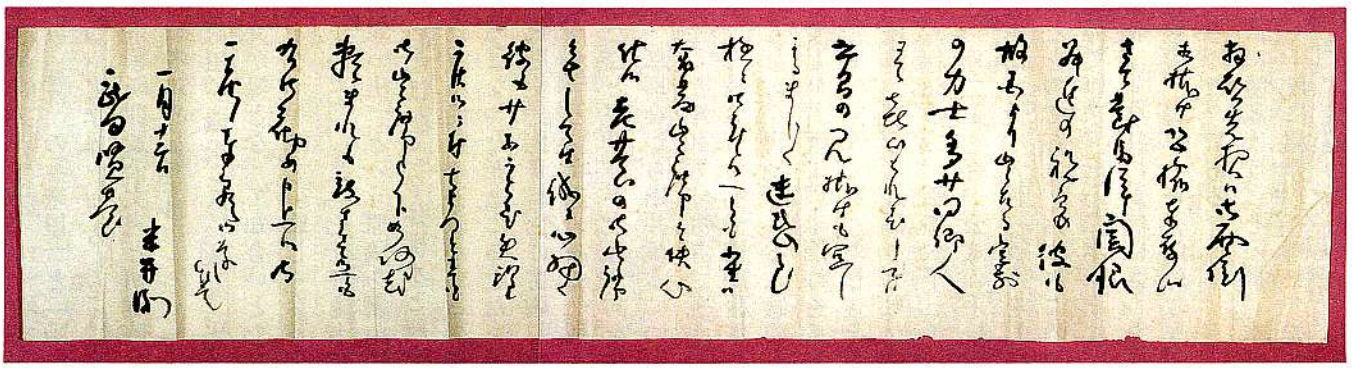
半井桃水（写真提供：西日本新聞社）

対馬が生んだ新聞記者で小説家、そして、樋口一葉の小説の師で、一葉が終生好意を寄せた人でもあった半井桃水は、明治～大正期の対馬を代表するジャーナリスト・文化人で、かつまた大正ロマンの終焉とともに逝った一代の美丈夫であった。

三

半井桃水が郷里対馬出身の力士、対馬洋の関脇昇進に関し、同じ対馬の出で、先輩格の武田尚に宛てた一通の書状がある。

拝啓、先夜ハ御面倒
相掛け、恐縮奉存候、
さて、対馬洋関脇
昇進の祝宴、彼も
故国より出たる空前
の力士、多少同郷人
にて喜びくれすしてハ、
世間の見掛けも宜し
かるまじく、迷惑至
極ニ御座候へとも、小生ハ
奮発出席と決心



半井桃水書状　封筒表書：麹町区三年町二、有栖川宮付属地内、武田尚様
同裏書：牛込若宮町三七、半井冽
（縦17.8cm×横75.2cm）

仕候、老台の御出席
無しては、誠ニ心細く、
彼も少なからず失望
可仕候ニ付、ちょっとにても
御出席被下、如何哉、
頼まれも致さす候へとも
右御勧め申上候、御
一考奉願候、草〻
頓首

一月十二日　半井冽

武田賢台

対馬洋関脇昇進の祝宴に、五歳年上の武田尚に、かるく出席を勧める内容の手紙であるが、その流麗な筆致の行間に、後輩が先輩を祝宴に誘うことへの多少の遠慮と躊躇が入り混じるなか、やはり先輩に出席を願って、少しでも盛大に、同郷出身力士の昇進を祝い、あわせて以後の活躍を激励したいという気持ちが吐露されており、同郷人を思う桃水の人となりの一面を偲ぶことができる。

対馬洋こと川上弥吉は、明治二十年（一八八七）八月十九日、川上直吉と美以の次男として、下県郡久和村十二番戸（現厳原町久和）に生まれた。弥吉は、雞知の重砲大隊に入隊中、背が高いので兵隊より相撲取りになれとの師団長（浅山十二師団長）の一声で除隊となり、明治四十一年（一九〇八）、二十一歳で出羽ノ海（常磐山）部屋に入門した。[10] 身長六尺三寸（一九〇㎝）、体重二十八貫（百五㎏）の巨体で、なかなかの怪力の持ち主であった。

初土俵は、入門して二年後の明治四十三年（一九一〇）の一月場所からで、大正三年（一九一四）一月入幕に至るまで序ノ口勝負、序二段で四勝二敗、三段目で八勝一敗、幕下で同じく八勝一敗をあげ、七場所目（大正二年五月）に十両入りを果たし、八場所目（大正三年一月）に入幕した。

対馬洋が関脇に昇進したのは大正五年（一九一六）の一月場所である。この書状の封筒の消印にも「5 1 12」が読みとれる。桃水は、この年大正五年一月、対馬洋の関脇昇進が決まるや、直ちに武田宛にこの書状を書いた。すなわち、この書状は大正五年一月十二日、桃水五十四歳の春に認められ投函された書状ということになる。この宴会がいつ、どこで、どのような規模で開かれたのか、また武田が出席したかどうかなどについてはその後の消息がなく不明である。

対馬洋は大正六年（一九一七）、厳原八幡宮に、有名力士三十人一行と共に後援者・稲垣柳次郎の招聘で巡業、故郷に錦を飾ったが、この時には、全島から押し寄せた大勢の見物人で賑わったという。その後、大正八年（一九一九）一月場所で東方大関に進んだが、左腕の負傷もあって従来の威力も減じ、大関の地位は二場所で去り、第一線を退いたのは大正十一年（一九二二、最終場所）であった。引退後は、年寄とならず廃業、郷里に帰った対馬洋は、農業などをして静かに余生を送ったが、昭和八年（一九三三）三月十一日、厳原町今屋敷の協立病院で没した。[11] 享年四十七歳。墓は、厳原町久和にある。

対馬洋、右は後援者稲垣柳次郎
（大正6年対馬巡業時カ、写真：中田正人氏提供）

四

この書状が本館の所蔵に帰した経緯について、簡単に誌しておく。

本書状の宛名である武田尚（安政二年二月十一日生れ）は、もと下県郡宮谷町六拾二番戸（現厳原町宮谷）に居住、その父は武田喜三郎（文政五年九月十五日生れ）、母は幸（文政十一年四月二十日生れ）、祖父は甚兵衛といった。武田尚は、のち（遅くとも明治二十一年ころまでに）東京府東京市麹町区三年町二番地に転籍している。

尚は、妻カ子[ネ]（元治元年九月五日生れ）との間に嗣子がなかったことから、明治四十二年十月二十五日、田辺松五郎長男勝蔵（明治二十九年九月生れ、母は垣島スエ）と、養子縁組をする。武田勝蔵（故人）である。武田勝蔵は、大正六年（一九一七）慶応大学一年で二十一歳の時、卒業論文作成準備のため養父尚の郷里対馬を来訪、折から訪れた木坂（峰町）の「産屋」と「両墓制」について学界に報告した[12]ほか、「伯爵宗家所蔵豊公文書と朝鮮陣[13]」などの論考がある。

武田勝蔵氏とは、筆者が草した小文[14]が縁となって知合いとなり、何回となく手紙を頂戴し（大変な手紙マニアであったが）、また「七十年も昔の木坂の思い出[15]」という原稿を書いていただいたほか、「半井桃水と親交のあった養父尚宛の書状があるので、知合いになった記念にあなたを通して対馬歴史民俗資料館に寄贈したいがどうか」と、文通のみで一回も面会したことがない小生に意向を聞かれた。私事ながら半井桃水については小生らが昭和四十九年（一九七四）に編集した厳原町の小学校副読本に[16]、子どもたちが自慢できる人物の一人としてとりあげて以来関心をもってきた先学の一人であったし、その書状が頂戴できるとは願ってもないことであったので、昭和六十三年（一九八八）一月二十七日、公式の手続きを経て本館に受け入れ（受贈）をしてもらったものである。桃水がこの書状を認めて以来、七十二年ぶりに、その書状は、当初の封筒に入ったままの状態で、郷里の資料館に収まることになったのである。

武田勝蔵氏は、その折、本書状を広く一般に紹介し、郷土の先輩を顕彰して、後進の指針の一つにしてほ

しい旨、小生に託された。にもかかわらず、小生はといえば、生来の怠慢からその機を失し、すでに十年近くが経過したが、図らずも三年前より本館に勤務する巡り合わせになったこともあり、拙文ながら桃水ならびに話題の対馬洋についての若干の解説を加え、本書状の紹介と同書状が本館の所蔵に至った事情について述べるとともに、武田勝蔵氏のご好意と御遺志を披瀝し、併せて同氏への感謝の意を表すものである。

註

(1)『日記・若葉かげ』明治二十四年四月十五日条(塩田良平『樋口一葉』八五ページ)
(2)宗家文庫史料『医師・外科御奉公帳』
(3)明治三年、尺振八によって、東京府管下本所相生町(墨田区)に開かれた英語塾
(4)塩田、前掲書七七ページ
(5)明治十五年(一八八二)七月二十三日、兵制改革に伴う兵士の反乱に民衆が合流し、ソウルの日本公使館等が襲撃された事変。
(6)和田芳恵『樋口一葉伝』五九ページ
(7)『かきあつめ』明治二十六年六月初め、(塩田、前掲書、一二九ページ)
(8)同書、一二九ページ
(9)同書、一三〇ページ
(10)『対馬風土記(第十一号)』六五ページ
(11)晩年、厳原の西ノ浜で酒屋を経営したという(中田正人氏談)。
(12)「対馬木坂地方の産屋と輪墓」(『民族と歴史』第二巻第三号、大正八年四月)
(13)『史学』第四巻第三号、大正十四年)
(14)『対馬風土記(第二十二号)』編集後記
(15)『同誌(第二十四号)』に掲載
(16)『わたしたちのいずはらまち』七四ページ

(小松勝助)

開館二十周年記念事業メモ

【開場式・式典】平成九年十一月九日

【特別講演】「朝鮮後期(江戸時代)、日韓交流史研究の新紀元を求めて」
韓国国史編纂委員会委員長　李元淳氏

【調査報告】「宗家文庫一紙物調査について」
関西大学教授　泉澄一氏

【シンポジウム】
テーマ:「対馬と韓国との文化交流史」
パネラー:
富山大学教授　藤本幸夫氏
東京大学教授　村井章介氏
九州大学助教授　佐伯弘次氏
韓国教員大学校教授　鄭永鎬氏
同国史編纂委員会研究委員　李薫氏
(司会)本館課長　小松勝助

【特別史料展出陳目録】
〈期　日〉平成九年十一月九日～三十日
〈出陳点数〉五十二点。内六点重文(ゴチック体)、同じく、内八点韓国より借用、展示(＊印)
〈図　録〉『対馬と韓国との文化交流史』A4版、本文八五ページ、うち、カラー四九ページ

1、銅造菩薩形立像　(七世紀)
2、**銅造如来形立像**　(八世紀)
3、観音坐像内結縁文　(一三三〇)
4、青磁貼牡丹唐草文大花瓶　(十三世紀)
4、青磁象嵌蒲柳文梅瓶　(十二世紀)
6、青磁彫刻鳳凰形水注　(十二世紀)
7、粉青沙器象嵌簾文瓶　(十五世紀)
8、大般若経(高麗版初雕本)　(十一世紀)
9、大般若経(高麗版再雕本)　(十三世紀)
10、大般若経(元版)　(一三二六)
11、大蔵経(高麗版再雕本)　(十三世紀)
12、大方広仏華厳経(元版)　(一四六九)
13、**旧清玄寺梵鐘**　(2個、内1、一二四五)
15、**＊受職倭人の告身**(8通)(内3、＊内3、一四七七～一六二三)
16、中世文書(3通)　(一三六九～十六世紀)
17、図書と木印(6個)　(十五～十六世紀)
18、『事林広記』(中国刊本)　(元版)
19、『東坡先生詩集註』(同)　(明版)
20、『捷解新語』(朝鮮刊本)　(一六七六)
21、『攷事撮要』(同)　(一五六八)
22、＊書　契(3通)　(一六二三～一七一七)
23、朝鮮通信使行列絵巻　(江戸時代)
24、草梁倭館絵図(3幅)　(同)
25、佐須奈絵図(2幅)　(同)
26、＊府中湊絵図　(同)
27、対馬国絵図(元禄絵図)　(一七〇〇)
28、＊対馬国絵図(寛政絵図)　(一七九四)

『対馬歴史民俗資料館館報』総目録(創刊号～第二十号)

◇創刊号　(昭和五十三年三月)
特別企画「対馬の考古・美術」展案内
創刊の辞　(館長)益田友一
式　辞　(長崎県教育委員長)山田治助
あいさつ　(長崎県知事)久保勘一
祝　辞　(対馬町村会副会長)長　九郎
御祝いの言葉
対馬文化財調査委員会委員長　古藤　満
対馬歴史民俗資料館の設立について
資料紹介

◇第二号　(昭和五十四年三月)
昭和五十四年度「前期展」案内
古鐘頌……白井　伝
絢爛たる時代……津江篤郎
対馬の縄文文化と本館収蔵資料……永留久恵

◇第三号　(昭和五十五年三月)
本館架蔵の朝鮮通信使絵巻と仏画について……津江篤郎
対馬の弥生文化と本館収蔵資料……永留久恵
斎藤家文書について……白井　伝

◇第四号　(昭和五十六年三月)
朝鮮仏鑑賞・本館展示の仏像
その他…津江篤郎
古文書を読む……白井　伝

◇第五号　(昭和五十七年三月)
本館架蔵の元禄古地図について……永留久恵
ツシマヤマネコ等の収蔵について……津江篤郎
近世史料取扱い受講の記……白井　伝

◇第六号　(昭和五十八年三月)
「御本」考……津江篤郎
本館架蔵の「郷村絵図」について…永留久恵
収蔵地方文書について……白井　伝

◇第七号　(昭和五十九年三月)
対馬を描いた浮世絵……津江篤郎
府中城下町絵図について……永留久恵
開館五周年記念行事の「対馬宗家資料展」を顧みて……白井　伝
主な常設展示品のご案内

◇第八号　(昭和六十年三月)
千金丹の版木……津江篤郎
伊能勘解由の対馬測量……長郷嘉寿
対馬の「嫁入婚」小史……永留久恵

◇第九号　(昭和六十一年二月)
鶴と亀……津江篤郎
以酊開山玄蘇和尚の墓……長郷嘉寿
餅と団子……永留久恵

◇第十号　(昭和六十二年二月)
宗星石……津江篤郎
口切り茶事……長郷嘉寿
「磐座」考……永留久恵

◇第十一号　(昭和六十三年二月)
古代対馬の郡郷制序説……永留久恵
改印のない皿秤……日野義彦
清玄寺鐘由来考……長郷嘉寿

◇第十二号　(平成元年三月)
いわゆる「朝鮮式山城」について…永留久恵

オランダ人を請い取られる事……長郷嘉寿
対州馬……日野義彦

◇第十三号　（平成二年三月）
「津島紀略」と「対州編年略」……永留久恵
漂流唐船の長崎送り……長郷嘉寿
染崎延房……日野義彦

◇第十四号　（平成三年三月）
館長あいさつ……山下義之
対馬歴史民俗資料館案内……
収蔵資料案内……
展示品の案内「アサムシキ」……
歴史民俗資料館への足音……
子どもたちの手紙……
資料寄贈者一覧……
歴史民俗資料館の案内……

◇第十五号　（平成四年三月）
館長あいさつ……永松成敏
近世の対馬捕鯨雑話……日野義彦
豆酘の「ハギトウジン」……大畠精一
本館架蔵の清水山城絵図について…三浦忠和
資料寄贈者一覧……

◇第十六号　（平成五年三月）
館長あいさつ　永松成敏
文禄慶長役後の日朝関係と対馬……大畠精一
対馬藩の小学校……三浦忠和

◇第十七号　（平成六年三月）
館長あいさつ……中山恒夫
日奥上人……大畠精一
対馬藩の教育―藩立学校思文館を中心として―……三浦忠和

◇第十八号　（平成七年三月）
鷹田家文書（目録）……
陶山先生叢書……

◇第十九号　（平成八年三月）
「国境の島」から「国交の島」へ…赤木孝夫
寛政の島原大変と「島原大変図」…小松勝助
阿須川の開鑿と義真の町づくり……長郷直明
畠木庭の管理について……滝本啓美
短　信……藤崎利明

◇第二十号　（平成九年三月）
対馬の歴史と宗家文庫史料……中村仁志
鰐浦沖遭難訳官使姓名簿の発見―元禄十六年―……小松勝助
府中湊の「やらいの構築」……長郷直明
本館入館者の概要……松島庄三郎

執筆者別

赤木孝夫
「国境の島」から「国交の島」へ……(19)
大畠精一
豆酘の「ハギトウジン」……(15)
文禄慶長役後の日朝関係と対馬……(16)
日奥上人……(17)
長　九郎
祝　辞……(1)
久保勘一
知事あいさつ……(1)
古藤　満
御祝いの言葉……(1)
小松勝助
寛政の島原大変と「島原大変図」……(19)
鰐浦沖遭難訳官使姓名簿の発見……(20)
白井　伝
古鐘頌……(2)
斎藤家文書について……(3)
古文書を読む……(4)
近世史料取扱い受講の記……(5)
収蔵地方文書について……(6)
開館五周年記念「宗家資料展」を顧みて(7)
滝本啓美
畠木庭の管理について……(19)
津江篤郎
絢爛たる時代……(2)
本館架蔵の朝鮮通信使絵巻について……(3)
朝鮮仏鑑賞・本館展示の仏像その他……(4)
ツシマヤマネコなどの収蔵について……(5)
「御本」考……(6)
対馬を描いた浮世絵……(7)
千金丹の版木……(8)
鶴と亀……(9)
宗星石……(10)
中村仁志
対馬の歴史と宗家文庫史料……(20)
中山恒夫
館長あいさつ……(17)
長郷嘉寿
伊能勘解由の対馬測量……(8)
以酘開山玄蘇和尚の墓……(9)
口切り茶事……(10)
清玄寺鐘由来考……(11)
オランダ人を請い取られる事……(12)
漂流唐船の長崎送り……(13)
長郷直明
阿須川の開鑿と義真の町づくり……(19)
府中湊の「やらいの構築」……(20)
永留久恵
対馬の縄文文化と本館収蔵資料……(2)
対馬の弥生文化と本館収蔵資料……(3)
本館架蔵の元禄古地図について……(5)
本館架蔵の「郷村絵図」について……(6)
府中城下町絵図について……(7)
対馬の「嫁入婚」小史……(8)
餅と団子……(9)
「磐座」考……(10)
古代対馬の郡郷制序説……(11)
いわゆる「朝鮮式山城」について……(12)
「津島紀略」と「対州編年略」……(13)
永松成敏
館長あいさつ……(15)
館長あいさつ……(16)
日野義彦
改印のない皿秤……(11)
対州馬……(12)
染崎延房……(13)
近世の対馬捕鯨雑話……(15)
藤崎利明
短　信……(19)
益田友一
創刊の辞……(1)
松島庄三郎
本館入館者の概要……(20)
三浦忠和
本館架蔵の清水山城絵図について……(15)
対馬藩の小学校……(16)
対馬藩の教育……(17)
山下義之
館長あいさつ……(14)
山田治助
式　辞……(1)

短　通

平成九年度業務（平成十年一月末現在）

〔資料の保管・調査に関すること〕

(1)虫食文書の裏打修復作業（継続）

平成四年度～平成九年度まで……五九冊（一八、七八九丁）

平成九年四月～平成十年一月まで……二八冊（九、五四一丁）

累　計……八七冊（一八、三三〇丁）

(2)史料の撮影、焼付け

マイクロフィルム撮影（本数）……六一本

撮影した本（毎日記など）の冊数…一五三冊

紙焼き写真帳…一八冊（日記など二六冊分）

(3)宗家文庫史料（一紙物）の調査

平成二年度よりの継続事業

平成九年度……四、一六九点の仮目録作成

平成九年度職員一覧

館長（兼務）　中村仁志　研究員　藤崎利明
課長（同）　永留保幸　同　松島庄三郎
主査（同）　鹿島一雄　事務嘱託　椎葉徳子
課長（学芸員）　小松勝助　同　藤本祐子
学芸員補　西山　篤　同　梅野裕美